

# 文化学園大学短期大学部所蔵被服構成学実習教材について

## Teaching Materials for Clothing Construction Utilized at Bunka Gakuen University Junior College

近藤 尚子\* 田中 直人\*\* 中村 弥生\*\*\* 小出 恵\*\*\*\* 関口 光子\*\*\*\*\*

Takako Kondo, Naoto Tanaka, Yayoi Nakamura, Megumi Koide and Mitsuko Sekiguchi

### 要旨

本資料紹介では、本学短期大学部所蔵の被服構成学実習教材について扱う。短期大学部では昭和 25 (1950) 年の設置以来、被服構成学を軸とし技術習得に重きを置いたカリキュラム編成をおこなってきた。ここに不可欠なのは、技術指導時の学生理解を助ける「実習教材」であるが、同学部ではこれを長きにわたり若手教員を中心に作成してきた。教材には多様なものがあるが、とりわけ重要なのは完成品見本である「標本」とその設計図ともいえる「作図」であり、これらは計 1709 点が残されている。時代特有のデザインが表現されること、往時の指導にあって特に注意が払われた点が直接知られることなどから、得難い貴重な資料であるといえる。短期大学部は 2020 年に創立 70 年の節目を迎える。これを前に来し方を振り返るための資料を整理し、これに関心を持つ者の間で共有することには少なからざる価値があるものと考えている。文化ファッション研究機構では、こうした大学内所蔵でいまだ広く存在が知られていない貴重な資料の整理、公開の必要性を強く感じており、これらの簡易的な調査、整理および公開のための手法の検討を進めている。本調査はこうした問題関心に基づきおこなわれたものである。

●キーワード：平面作図 (flat patterns making) / 標本 (clothing specimens) / 研究資源化 (research resources)

### I. はじめに

文化学園大学短期大学部（以下、短期大学部）は短期大学制度が発足した昭和 25 (1950) 年度に設置され、令和 2 (2020) 年度には創立 70 周年を迎える歴史ある短期大学である<sup>1)</sup>。

同短期大学部は、服装科（現・ファッション学科）として設立され、当初より一貫して被服構成学<sup>2)</sup>を軸としたカリキュラム編成となっている。また、2 年制を卒業した学生を対象により高度な学修を行う課程として、昭和 43 (1968) 年度より 1 年制の専攻科被服専攻を、さらに昭和 61 (1986) 年度には 1 年制の研究生を設置した。

2 年制の短期大学部では、1 年次にはブラウス、スカート、パンツ、ワンピースを、2 年次にはスーツ、コート、礼服などの製作を行った<sup>3)</sup>。各アイテムとも基本の作図とともに素材ごとの縫製法に重点を置いている。専攻科では素材の扱いを中心に学び、皮革、毛皮、伸縮素材など特殊素材を用いた作品や、リバーシブル、ベルベット、透ける素材などフォーマルに用いられる高級素材を用いた作品を製作、前期後期にそれぞれ 1 回ず

つ、多いときは文化祭や海外でもファッションショーを行った。研究生では、工業用パターンメイキング、アパレル CAD、手編み・ニット CAD によるニット製作、立体裁断によるスーツ製作などより実践的な製作技術の修得と有名デザイナーのデザイン・パターン研究やマーチャライジングなどマーケティング戦略のカリキュラムもあった。専攻科は平成 29 (2017) 年度、研究生は平成 15 (2003) 年度に募集を停止しており、現在これらの課程はない。

このように、短期大学部では技術の習得を重要視し、卒業後は即戦力として働くことのできるパタンナーやデザイナーの育成を目指したカリキュラム編成をおこなってきた。その際に不可欠なのは、技術をより学生に分かりやすく教授するための「実習教材の作成」である。本稿では、この実習教材について概要を紹介する。

### II. 短期大学部の実習教材ー標本と作図

まず、服を製作する際の一般的な工程は、

- ①デザイン決定
- ②各自デザインによるパターンメイキング

③裁断・印付け・仮縫い・試着補正

④縫製

である。

①デザインはデザイン画<sup>4)</sup>として表現されるものである。②パターンメイキングは、①のデザインから服を製作するために書く設計図で、大きく分けて平面作図と立体裁断がある。短期大学部では、まず平面作図を基礎として教えることとしており、各自の実大サイズではなく、文化式原型の4分の1縮尺（もしくは5分の1縮尺）で作図する。これを行うことによって作図の手順が理解できる。また、パターンとは実大で作図したのちこれを写し取り切り抜き作成するもので、生地を裁断する時に使うものである。③裁断・印付け・仮縫い・試着補正とは準備工程ではあるが、裁断・印付け後、仮縫いし試着・補正を行い、パターンを修正し、仕上がりを確認することに意味を置く、本縫いに入る前の重要な工程である。④縫製とは、服として完成させる工程である。このようにして、服は出来上がるのである。

この中で、本稿で紹介する教材は、④の工程で使用する「標本」と①～②の工程で使用する「作図」及び「デザイン画」である。標本とは、④で実際に縫製する時に、学生が完成形をイメージできるようにと作成したもので、完成形の標本と縫製の途中段階が分かるようになっている部分標本の2種を作成している。短期大学部では、時代に即した授業を行うためには毎年実習教材を作成しているが、カリキュラム改定や引越など様々

な要因により廃棄したものもあり、現存しているのは実習教材の中核を担う標本439点（表1）と作図1,270枚（表2）である<sup>5)</sup>。現時点で分かっている最も古い教材は昭和47（1972）年作成の作図とデザイン画である。

これら標本と作図は、その時々若手教員が作成してきたものである。本来は学生指導の効率化、適正化をはかるためのものであったが、これら教材を作成すること自体が、若手教員の製作技術の向上や、部分標本としてどの縫製工程を切り取るかを考える契機となっていたのである。また、短期大学部では一時期学生数が1学年600人超在籍しており、6クラスが同時開講していたため、どのクラスでも同質の授業を行うには実物標本や部分標本は不可欠であり、さらに教員間のコミュニケーションを図る意味でも標本・作図の作成は必須であったと考えられる。

現在、標本と作図は別々に保管されており、分類方法も異なるため、照合が難しい状況である。現時点で両者を紐付けできた作品は59点であるが、現存する標本と作図を精査できていないため、今後点数の増加が見込まれる。

以下、ブラウス、スカート、パンツ、ワンピース、スーツ、コート、礼服、ジャケットの8アイテムについて作品写真付きで紹介する（表3）。

図1に示したデザイン画と作図は表3の「スーツ仮縫い（D-イ-21）」に対応するデザイン画と作図である。

表1 標本の点数（標本ファイルの分類による）

No.	アイテム	点数
1	ブラウス	62
2	スカート	55
3	パンツ	17
4	ワンピース	41
5	スーツ	59
6	コート	28
7	ジャケット	17
8	ベスト	4
9	下着	30
10	子供服	28
11	毛皮	33
12	スペアカラー	10
13	アクセサリ	46
14	図書標本	9
合計		439

表2 作図、デザイン画の点数（作図ファイルの分類による）

No.	ファイル名			資料枚数
	年次	服種など	年度	
1	1	ブラウス スカート	-	205
2		パンツ	-	39
3		ワンピース	-	154
4	2	スーツ	～S63年度	85
5			H1年度～	120
6		コート	H1年度～	168
7		礼服	～S63年度	98
8			H1年度～	200
9		被服構成Ⅲ (単衣コート)Ⅱ	-	23
10		作図原本	S63以前	113
11		授業予定表	H3年度～	65
合計				1,270

表3 標本（婦人服）の写真と修得させたい技術<sup>6)</sup>

			
<p>ブラウス (A-73) 昭和 59 年度作成</p>	<p>スカート (B-58) 昭和 60 年度作成</p>	<p>パンツ (D-へ-18) 平成 4 年度作成</p>	<p>ワンピース (C-145) 昭和 62 年度作成</p>
<p>綿織物・芯地（接着芯含む）の扱い、衿、袖、ボタン付け、ボタンホール、胸ぐせ</p>	<p>毛織物（中肉）・裏地の扱い、ベルト・ファスナー付け、ウエストダーツ</p>	<p>綿織物または毛織物（中肉）・裏地の扱い、前あきファスナー</p>	<p>綿織物または毛織物（中肉）・裏地の扱い、ファスナー付け、胸ぐせ</p>
			
<p>スーツ仮縫い (D-イ-21) 昭和 57 年度作成</p>	<p>コート (E-66) 昭和 59 年度作成</p>	<p>礼服 (C-146) 昭和 62 年度作成</p>	<p>一重ジャケット (D-ホ-29) 昭和 62 年度作成</p>
<p>毛織物（中肉）・裏地・芯地（接着芯含む）の扱い、ボタン付け、ボタンホール、テーラードカラーの作図法、2枚袖、胸ぐせ</p>	<p>毛織物（厚地）・裏地・芯地（接着芯含む）の扱い</p>	<p>絹織物または化繊織・裏地・芯地（接着芯含む）の扱い</p>	<p>綿織物または毛織物（中肉）・芯地（接着芯含む）の扱い、一重仕立ての方法</p>

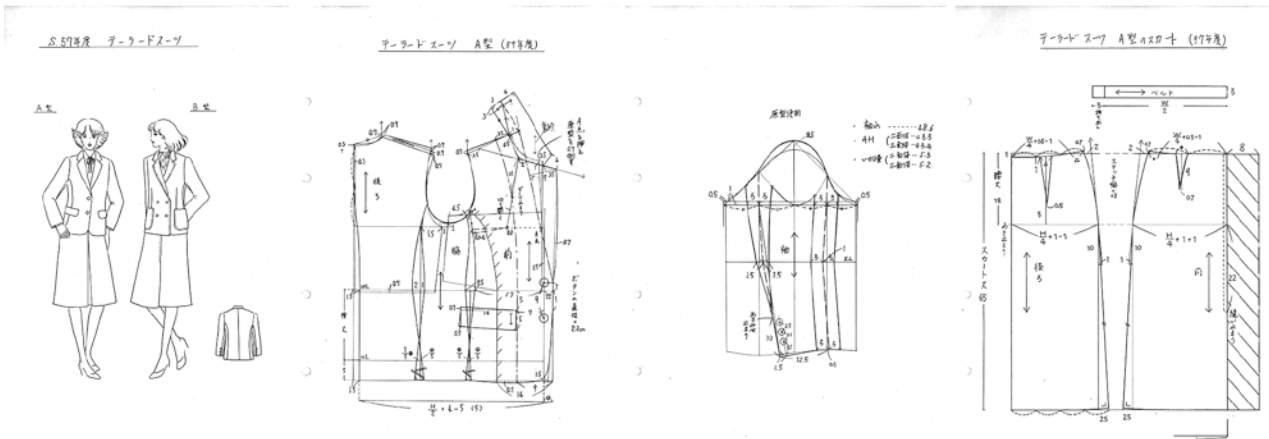


図1 スーツ仮縫い (D-イ-21) のデザイン画及び作図

デザイン画、テーラードジャケットの作図、2枚袖の作図、セミタイトスカートの作図 (左から)

図1を見るとテーラードジャケット・2枚袖・セミタイトスカート、いずれの作図も右半身だけがかかっていることが分かる。これは、文化式原型のかき方を「人体は特別な例外を除けば、大体左右均整ですから半身だけを作図し、反対側は必要に応じてうつします。」<sup>7)</sup>、また「作図する際の約束事として上前を作図することにし」<sup>7)</sup>としており、図1の資料が婦人服であるため、作図は右半身のみがかかっている。したがって、資料が紳士服の場合、作図は左半身のみがかかれることとなる<sup>8)</sup>。デザイン画と作図の他に一部の資料ではデザイン画に付随して、使用した生地について生地見本・名称・組成・使用量・価格・厚さを記載しているものもあった。これは学生が生地を購入する際の参考とするためである。また、試着補正後の赤ペンで修正が入っているものや、1mm単位でダーツや開き寸法を修正しているもの、教員用作図・学生配布用作図・板書用作図と1つの作品で数パターンの作図が残っていたものもあり、教え方に工夫を凝らしている跡が見られた。

### Ⅲ. 所蔵資料情報を公開することの目的

#### I) 資料情報共有を求める社会の動き

こうした小文を成し、資料情報の公開を進めんとするのは、ひとえに資料に関する情報を研究室外にも共有し、今後の利用に供せんと考えるためである。

内閣府では近年、情報のデジタル化と共有化を前提とした新たな計画を数多く打ち出している。こうしたなか、平成29年4月、デジタルアーカイブの連携に関する関係省庁等連絡会・実務者協議会はデジタルアーカイブ推進事業の目的を以下のような文言<sup>9)</sup>としてまとめている。

様々なコンテンツをデジタルアーカイブしていくことは、文化の保存・継承・発展の基盤になるという側面のみならず、保存されたコンテンツの二次的な利用や国内外に発信する基盤となる重要な取組であり、欧米諸国を中心に積極的に推進されている。デジタル時代における「知るため・遺すため」の基盤として、場所や時間を超えて書籍や文化財など様々な情報・コンテンツにアクセスすることを可能とする他、分野横断で関連情報の連携・共有を容易にし、新たな活用の創出を可能とするものである。(中略) こうした活用を通じて、デジタルアーカイブの構築・共有と活用の循環を持続的なものとし、その便益を「アーカイブ機関」を通じて国民のもの

としていくことで、我が国の社会的、文化的、経済的発展につなげていくことが重要である。(下線、筆者)

ここにいう「コンテンツ」とは、主に社会・文化・学術情報資源のことであり、デジタル・アナログ双方の資料・作品が含まれるとする。また生み出す便益を国民にとどける「アーカイブ機関」とは、社会・文化・学術情報資源であるコンテンツを収集し、整理(組織化)し、保存し、提供する機能を持つ機関・団体であり、具体的な施設として、美術館・博物館・図書館と並び、大学もここに位置づけている。

本学にはこうした社会からの要請に既に対応してきた実績がある。文化ファッション研究機構では平成30年まで、文科省指定による服飾文化「共同利用共同研究拠点」を運営してきた。拠点指定は研究者のハブとなり多様な共同研究を創出することを主眼としたものであったが、同時に本学園の所蔵資料の利用を広く学外の共同研究員にも開放した点に大きな特徴があった。なお、拠点指定は昨年度を以て終了したが、共同研究員制度は存続することが確認されている。また、平成27年から3年に渡り続いた文化庁委託「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」では、服飾分野のアーカイブ機関を訪ね、横断的な情報共有のあり方を模索すべく調査、検討を行ってきた。

これら研究機構における経験から、同分野においては資料情報の共有がいまだ不十分であること、今後これを進めるには、たたき台として「横断的共有のひな形」を作ることが必要であろうこと、などが知られた。本稿で取り上げる資料調査と資料情報のデジタルデータ化は、こうした問題意識に基づきなされるものである。

#### II) 研究室継承物の研究資源化

本学および本学園には、服飾分野における貴重な資料が数多く存在する。図書館、博物館など資料管理部署においては、資料の整理が日常的に進められ、デジタル化された情報が公開されているが、大学を含む資料収集を主たる業務としない部署では、研究・教育の過程で資料が収集あるいは作成されても、二次的利用を促すための作業は十分に進んでいないようである。ここに、貴重な資料の「研究資源化」、つまり今後の広範な利活用に供すべく「基礎情報の整理と共有」が求められるのである。

以下、本学における研究室継承物の研究資源化の現状について簡単にまとめておきたい。いくつかの研究室で

対応を尋ねるに、資料情報整理の必要性は理解しているが作業を進めるまでには至らない、との現状が知られた。加えて、この傾向は公費により「購入した資料」よりも、教員が自ら「作成した資料」においてとくに顕著であることも知られた。公費購入ではその手続き上、最小限の情報がリスト化されて残される。一方で作成資料については目録化のきっかけがないため、何らかの「動機付け」がない限り記録され難い、ということである。

本学における服飾分野の研究および教育が、デザインを含む「技術」追求を軸としていること、また技術以外の研究・教育も、それとの関わりのなかで体系化されていることに改めて思いをいたせば、そこに生み出される標本や作図といった素材群の共有化が望ましいことは論を俟たない。

推察するに、各研究室にて作成され継承されたこれら素材は、自らの手で作成したものであるが故に客観的な価値をはかり難いのではないだろうか。まずはそれらを整理し、情報として他者の目に触れさせること。併せて、研究、教育への活用方法を想像してみる。そうしたこれまでとは異なる視角から研究室継承物を観察することが必要であろうと考える。

#### IV. おわりに

本稿にて取り上げた「短期大学部所蔵被服構成学実習教材」は、70年の歴史を持つ研究室において、約50年前から蓄積されてきた資料群である。その持つ希少性を考えれば、閉じられた研究室のみで参照されるべきものではもはやなく、関心を寄せるより多くの技術指導者、研究者にその存在を知らしめ、共有資源としての活用之道を開くべきものである。今後、適切に整理し情報開示してゆくことで、服飾分野の研究・教育に資する、貴重な資源となり得るものと考えるのである。

こうした資料は恐らく学内に少なからず存在するものと考え。まずは基礎情報を共有することが肝要であ

る。価値判断をおこない保存を進めるための最初の一步は、広く知られることをおいて他にないものとする。

『文化学園大学紀要』第50集にも、同じ問題意識に基づいて同種の調査とその報告<sup>10)</sup>を行っている。併せて参照されたい。

#### 注

- 1) 昭和25(1950)年の設置時は文化女子短期大学として開学。その後、昭和39(1964)年度の文化女子大学開学に伴い、文化女子大学短期大学部と改称。そして、平成23(2011)年度の校名変更に伴い文化学園大学短期大学部となり現在に至る。
- 2) 被服構成学とは三吉は「少なくともデザイン、パターンメイキング、裁断および縫製、着装評価の4分野を包含していなければならない」(文化女子大学被服構成学研究室編『被服構成学理論編』文化出版局, 1985, p. 6)としている。短期大学部では、被服構成学という名称で開講し、テキストのタイトルもこの名称としていた。テキストの名称はその後、服装造形学、ファッション造形学と変遷して、現在はファッション造形という名称で開講している。
- 3) 平成6(1994)年度のコース制導入前までのカリキュラム。現在は異なる。
- 4) 本稿では、服を製作する上で必要なダーツや切り替え、ステッチなどの構成線がかかっているデザイン画のことを指す。
- 5) ここに示した所蔵点数は、購入した標本、作図やデザイン画以外の授業配布資料の枚数も含んでいる。
- 6) 表3内のアイテム名の後に括弧付きで示したアルファベットと数字の組み合わせは標本番号である。標本製作時のカリキュラム構成に沿ったものであったと思われ、現在使用している分類とは一致していない。また、ここに示した標本の中には現在のカリキュラムでは使用していない標本もある。
- 7) 文化服装学院・文化女子大学編『文化服装講座1 婦人服編(Ⅰ)』文化出版局, 1976, p. 56
- 8) 上前とは、打ち合わせが重なった時に上になる方の身頃のことを言い、現在一般的に婦人服は右前身頃が、紳士服は左前身頃が上前となるように縫製・着用される。そのため、作図は婦人服が右半身、紳士服が左半身をかくこととなっている。
- 9) 内閣府知的財産戦略推進事務局『我が国におけるデジタルアーカイブ推進の方向性』(2017)
- 10) 近藤尚子、田中直人、中村弥生、関口光子「学園内所蔵資料の研究利用促進に向けた初歩的検討と試行」『文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要 第50集』(2019)

